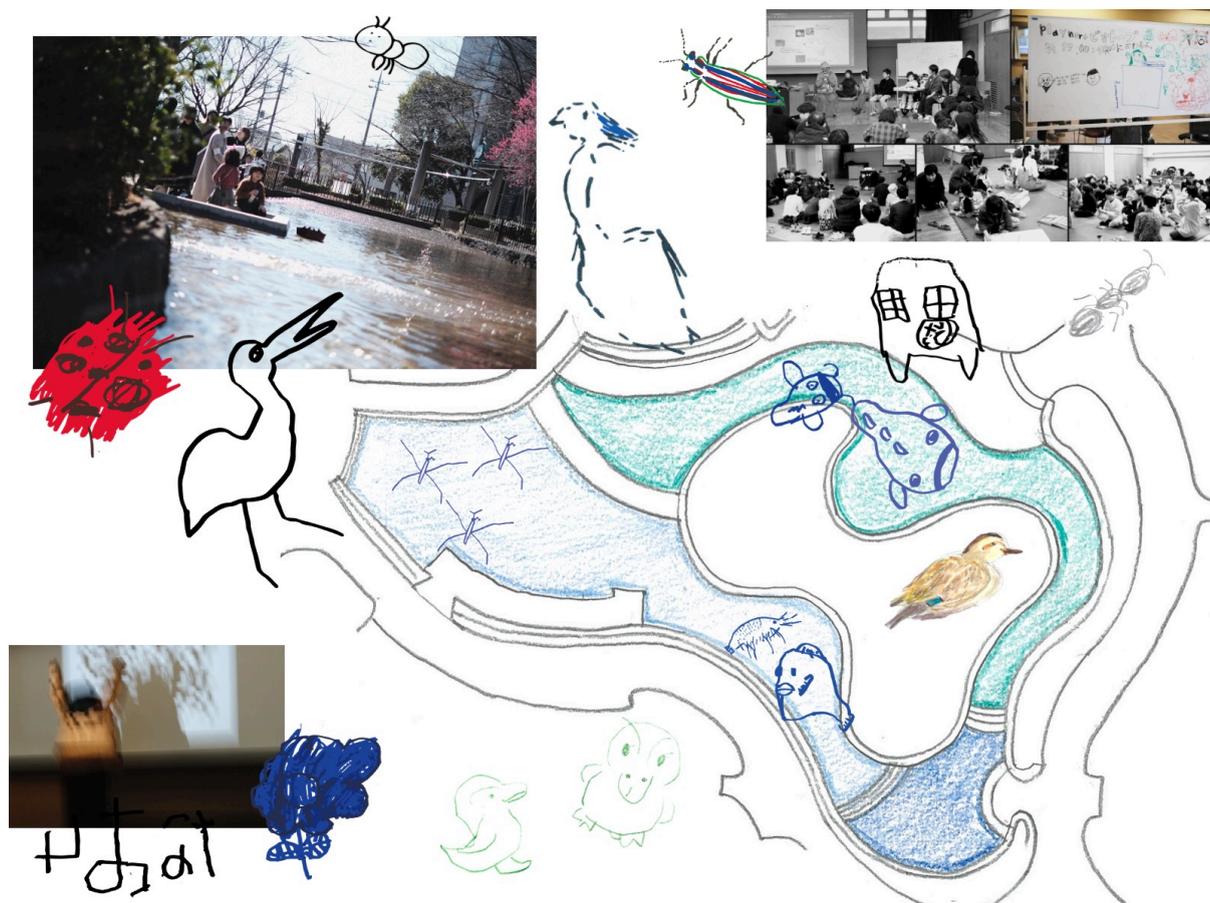


小金井みんなの公園プロジェクト「play here」

みんなで考えた、栗山公園ビオトープづくりの これまでとこれから

栗山公園に、インクルーシブ遊具が設置されました。その隣の池には、車椅子やベビーカーのままアクセスしやすいスロープの整備も叶いました。2025年度には、この池をどんなビオトープとして育てていくのかを考えるワークショップを開催し、参加者のみなさんと公園をフィールドワークしながら、生き物にとっても人にとっても心地いい場所はどんな環境か、そこでどんな関わり合いができるか、言葉を交わしてきました。

ワークショップには、小学校などさまざまな場所でビオトープをつくってきた東京学芸大学の関田義博先生にもご協力いただきました。生態系のお話や外来種との向き合い方、身近な自然を観察する視点などについてお話を伺いながら、参加者の皆さんとの対話を深めていきました。この計画書では、ワークショップの様子や、参加者の皆さんから生まれたアイデアや声、そしてこれからのビオトープづくりについてご紹介します。



目次

1. はじめに

公園はみんなのものですが、その「みんな」というものに入りづらい人がいます／水や自然に親しむことで、地域社会を豊かにしていく／ごちゃまぜ持ち寄りの、ピクニック気分を大切に／いのちを大切にしよう場所

2. ワークショップの流れ

2026年1月18日（日）まずはご挨拶／2026年2月1日（日）夢を膨らませたい／2026年2月21日（土）夢を叶える方法も考えたい

3. みんなの声やアイデア

目指したいビオトープってなんだろう？／いろんな生き物が過ごしやすい環境づくりのために／こどもの遊び場と、生き物のすみかの共存させたい／「何もしなくてもいられる」場所にしたい／感覚をひらくビオトープにしたい／もっとひらけた場所にしたい／そこに「ある」ことの価値／失敗もしていい。育て続ける場所にしたい。／インクルーシブは、関係の積み重ねかもしれない

4. ビオトープの計画案

生き物が暮らせて、人も関われる生態系。試しながら育てる、身体で自然を感じる、希望の場としてのにぎやかな命の場所

5. 2026年度年間計画案

1. はじめに

公園はみんなのものですが、その「みんな」というものに入りづらい人がいます。

たとえば、障害があるとされている子どもたちやその保護者の方々です。

いつも謝ってばかり。白い目で見られて心が折れる（だから、人がいない早朝の公園で遊んでいる）。我が子の安心安全が気がかりで休まらない。移動が大変、誰でもトイレがない、だからそもそも、公園に子どもを連れていけない。

多くの方からそのような声が寄せられました。それをなかつたことにしない。「みんな」というものを考えなおす。公園を、社会を、誰もが居て良い楽しいと思える場所にもっとしたい。小金井みんなの公園プロジェクト「play here」は、そのような想いでさまざまな活動を進めています。

水や自然に親しむことで、地域社会を豊かにしていく。

公園は、未来のための「練習場」です。

公園はどうあるべきか？という問いは、社会はどうあるべきか？という問いとほとんど同じようなもの。そして、公園は、より良い未来のための「練習場」。そう捉えることで、公園はより「みんなのもの」になっていくように思います。

ところで、「公園でしたい遊びは？」というアンケートで一番多かったのは、じゃぶじゃぶ池のような水遊びというものでした。新規の整備を検討したところ、その整備費用も維持管理費用も、膨大な金額になることが分かりました。そこで、頭を捻りながら考えたのは、今あるものを活かしていくという方法です。

栗山公園の池により手をかけて、（水遊びとまでいかないまでも）誰もが水や自然に親しみやすくなるようにする。車椅子やベビーカーでもアプローチしやすくする。どのようなビオトープにしていくのか？というところから「みんなで」考えたい。そのようにして、参加型のビオトープづくりが始まりました。

ごちゃまぜ持ち寄りの、ピクニック気分を大切に。

立場も年齢も背景も、ごちゃまぜ。それぞれが持ち寄って、成り立つ。それは、「ピクニック的」とも言えます。お菓子を、興味関心を、得意技や知見を、経験を、みんなで持ち寄る場をつくる。play hereのビオトープづくりは、そういったピクニック気分を大切にしています。

ビオトープのパンフレットで使われているイラストは、その際に子どもたちが描いてくれたもので、写真は、そのときの様子を写しているものです（play here公式サイトでも公開中）

出たり入ったりがしやすい。それぞれの過ごし方ができる。でも、なんとなく時間や場所や気分を共有している。雑談に花が咲く。耳を傾け合う。そのようにピクニックのような場であること。ピクニック気分が社会に広がっていく。それを叶えたいと考えています。

いのちを大切にしよう場所。

ピクニック的に持ち寄り合って成り立たせていく。これは、言い換えると「みんなでどうにかしていく」という意味では「自治的」とも言えます。文化人類学者であり、埼玉の見沼で福祉農園を運営する猪瀬浩平さんは、「自分たちにとって生きることを励ます営みを生み出すこと、それを僕は<自治>と呼びたい」と言い、「自分やほかの生命を大切にしたいと思う<やさしさ>から生まれる」ものとして自治を捉えています。

まさに、そのような意見がこのビオトープづくりに向けて、子どもからも大人からも聞くことになりました。それがあるということだけで、希望になるもの。人だけではなく、さまざまないのちが宿り、巡るもの。そのためには、どのような工夫が、活動が、哲学が必要か？

これは、それを試行錯誤しながら、地域の風景や習慣にしていくための取り組みであるように思います。栗山公園のビオトープづくり、是非、遊びにいらしてください。

2. ワークショップの流れ

基本的な流れ

- ①みんなで持ち寄ったお茶やお菓子を囲みながらおしゃべりする
- ②公園へのフィールドワーク
- ③もう一度おしゃべりする

第1回ピクニック

2026年1月18日（日）まずはご挨拶

プロジェクトの概要や思いの共有／play hereに期待することは？／どんな興味関心がある？／栗山公園ってどんな公園？／武蔵野の自然とは？／参考にすべき事例って？／ビオトープがあることの意味とは？

第2回ピクニック

2026年2月1日（日）夢を膨らませたい

これまでのふりかえりと共有／どんなビオトープにしていこうか？／どんな生きものに訪れてもらいたい？／ビオトープをつくった後に育むってどういうこと？

第3回ピクニック

2026年2月21日（土）夢を叶える方法も考えたい

これまでのふりかえりと共有／使い手が担い手になるってどういうこと？／どんなお世話が必要？



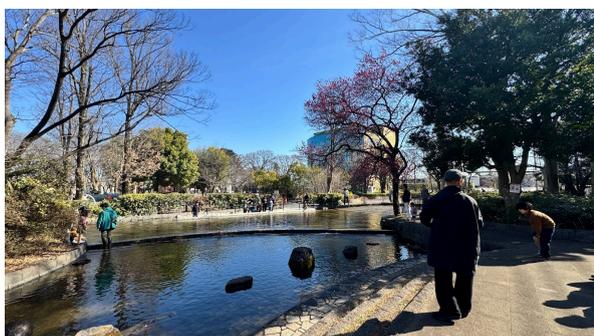
ワークショップを振り返って

立場も年齢も背景もさまざまな方が集まったワークショップでは、ピクニックのようにお菓子を持ち寄り、公園にフィールドワークにでかけ、みんなで感じたことや考えたこと、これまでの経験や思いを共有し合う時間を大切にしました。

魚が逃げられる隙間をどうつくる？どんな生き物に来てもらいたい？その生き物が過ごせるためにはどんなビオトープである必要がある？水に入るこどもたちと、入らずに観察する人、ぼーっとする人、みんながそこにいられる環境って？

「多様な生き物がここで暮らす」ビオトープという環境づくりに取り組むことは、生き物のための空間を考えることと同時に、さまざまないのちといのちの関係性を考えることでもあったように思います。ある生き物や植物を「ここに迎える」ということは、その生き物が生きていける水の深さや流れ、隠れ場所、日陰や日向といった環境や構造を整えることでもあります。そうすると、自然に「じゃあ、別の生き物はどうだろう？」という問いが生まれてくる。「誰かの居場所をつくる」ことは、同時に、他の誰かの居場所も想像することにつながっていくのかもしれない、と思えた時間でもありました。

正解を出すことよりも、耳を傾け続けること、違いをないものにしないこと。このワークショップは、完成したビオトープの設計図をつくる時間というよりも、わたしたち自身が、いろいろな人とともにあり続ける練習をする時間だったのかもしれない。そんなふうに耳を傾け合いながら環境を考えていく対話を、これから続けていけたらと思います。



3. みんなの声やアイデア

参加者のみなさんとのおしゃべりでは、みんなで考え続けたい問い、練習し続けたいこと、大切なテーマがたくさん紡がれていきました。まだ検討段階のものもたくさんありますが、参加者のみなさんからの言葉やアイデアをご紹介します。これからもみんなで考え続けていきたい問いとして、ぜひ一緒に味わっていただけたら嬉しいです。

①目指したいビオトープってなんだろう？

「単なる「池」ではなく、生き物が暮らせて、人も関われる、多様な生態系のある場所」「人がただ眺めるだけでなく、水・砂・冷たさ・感触を「身体で味わえる」場所」

「小さい魚も、水草も、虫も、鳥も、循環する環境に」「「きれいな展示物」ではなく、触れたり、入ったり、時に叱られたりもしながら、みんなで過ごす「生きた場所」にしたい」

②いろんな生き物が過ごしやすい環境づくりのために

「今のままだと、魚の隠れ場所がない。水草が根を張れない」「小さい生き物が育たないかもしれない」

「今の池はコンクリートが多すぎて、生き物の「逃げ場」がないかもしれない。周囲に岩や石を入れると逃げられる隙間ができて、魚や小さな生き物の隠れ家になるのではないか」「浅瀬と深いところを活かして、カメも魚もこどももみんなが過ごせる場所にしたい」

③こどもの遊び場と、生き物のすみかを共存させたい

「従来、この池はこどもの遊び場でもあった。水があると子どもが自然に引き寄せられる。人が入っても、生き物が生きられる設計にしたい」

「子どもが水に入る、砂利を踏む、水の冷たさを感じる、ぼしゃぼしゃ遊ぶことも大切。それでも生き物が逃げられる、隠れられる構造にしたい」

④「何もしなくてもいられる」場所にしたい

「ただのんびりしたい、ただぐるぐる歩きたい人もいる。観察だけしたい子もいる」「ぼーっとできるベンチがほしい」

「元気に遊ぶ子もいれば、ただのんびりしたい人もいる」「ぐるぐる歩き回りたい人もいれば、じっとしていたい子もいる。にぎやかさと静けさが同時に存在する。どんな過ごし方も正解にしたい」

⑤感覚をひらくビオトープにしたい

「水が入っただけで場の質が変わった」「光の反射・音・チャプチャプする感触が気持ちいい」「大自然にいかなくても、ここに小金井の自然がある」

「『環境教育』を教科書で学ぶ前に、『身体で自然を感じられる』場所に価値がある」
「水や自然は、遊具以上のインパクトを持つ存在なのかもしれない。単なる設備ではなく『感覚をひらく装置』になっている」

⑥もっとひらけた場所にしたい

「周囲の柵（池垣）柵があることで全体を見渡せない」「ぐるぐる歩けない感じ。ビオトープに気づかないかも？」

「一方で、安全性の懸念もある。小さい子が落ちてしまわないか？なくすのか？残すのか？段階的調整が必要」

⑦そこに「ある」ことの価値

「毎日行かなくても、「あそこにビオトープがある」ことが希望につながる」「ワークショップに1回参加したことで、家族だけでも再訪できた」

「人間以外の存在と同じ街に生きている感覚になる。子どもたちが遊んでいるかも、と思えること。魚や鳥が生きている場所がこの街にあると思えること。存在そのものが希望になる、この場所が自分たちのものになっていく」「これまで通り過ぎるだけだった栗山公園に「立ち寄る理由」ができた」

⑧失敗していい。育て続ける場所にしたい

「水草が枯れる、葉っぱが溜まる、泥でドロドロになる、生き物が減ることもあるかもしれない。でも、それも含めて「試しながら育てる場所」としてみんなに関わりたい」

「ビオトープは完成品ではなく、試しながら育てていく場所。失敗も共有できる関係の中で、少しずつ当たり前の風景にしていきたい」

⑨「インクルーシブ」は、関係の積み重ねかもしれない

「インクルーシブは関係性を設計することなのではないか」「ハード（設備）だけでなく人や雰囲気も含めてみんなに安心が生まれる」

「1回の特別な体験が、次の来園のハードルを下げることもある。顔見知りが増えて、挨拶できる人が増えていくことそのものが、安心して過ごせるきっかけになる」

4.ビオトープの計画案

参加者のみなさんから、ビオトープに対して多様な願いや考えが寄せられました。生き物が安心して暮らせる環境をつくりたいという声、人がただ眺めるだけでなく、水や砂、冷たさや感触を「身体で味わえる」場所にしたいという思い。子どもが遊びながらも生き物が隠れられる構造や、のんびり過ごせる空間の必要性。光や音、水の感触といった感覚をひらく場でありたいという声もありました。「ここにビオトープがあることそのものに価値がある」「失敗しても育て続ける場所にしたい」「人や生き物が安心できる関係を積み重ねたい」といった声も、たくさん聞こえてきました。検討段階のものもありますが、これらの声を受け止めながら、ビオトープの方向性を整理していきました。

ビオトープの計画案

生き物が暮らせて、人も関われる生態系。試しながら育てる、身体で自然を感じる、希望の場としてのにぎやかな命の場所

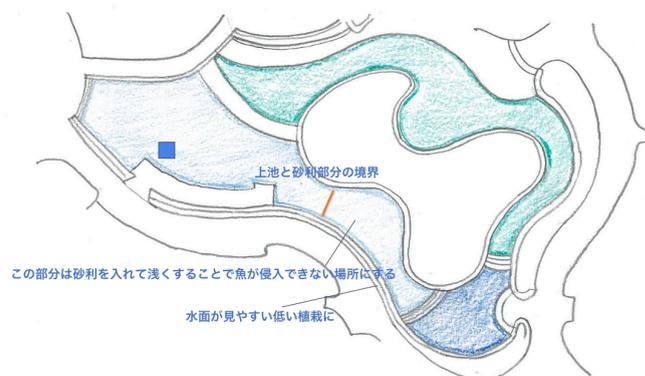


上池／キョロキョロ（水深20～25cm）

水草に触れてみよう。浅瀬のせせらぎに耳を澄まそう。

インクルーシブ公園エリアからつながる、車椅子やベビーカーのままでアクセスしやすいスロープから池全体を見渡すことができるエリア。

- ・下池との境には砂利を敷いて、わさび田のようにゆるやかな水の流れをつくる。
- ・セリやイグサ、ヒツジグサなど身近な水生植物をスロープからでも触れる場所に鉢で植え、手で触れたり、観察しやすく。
- ・中池に配置するハスやコウホネを、スロープからでも見渡せる植栽配置を検討。
- ・スロープ周辺に可動椅子などに座って眺めを楽しむこともできるように整備を検討。



イグサ



セリ



ヒツジグサ



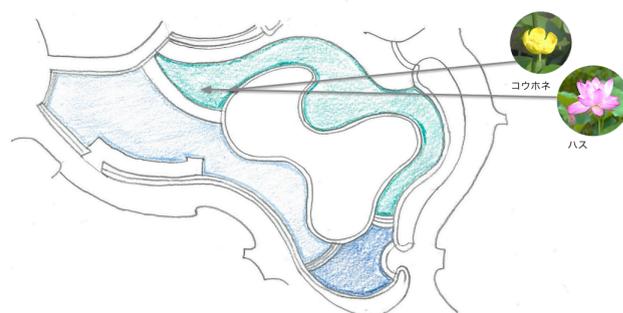
スロープからみた景色

中池／じゃぶじゃぶ（水深30～35cm）

水を味わう。自然に魅せられる。この場所があることが希望になる。

子どもたちが遊ぶ場所でもあり、生き物の観察や、感覚を開く体験もできるエリア。にぎやかさと静けさが入り混じる、生き物も人間も過ごしやすい場所に。

- ・子どもが水を味える遊び場と、生き物がクラス場所を共存させる「親水ゾーン」とする
- ・魚の逃げ道として、水中に岩を設置。小さな生き物でも安心して暮らせる場所に。
- ・スロープからも見える位置にコウホネやハスなど映える植物を配置し、水辺や植物を感じやすく。



コウホネ



ハス

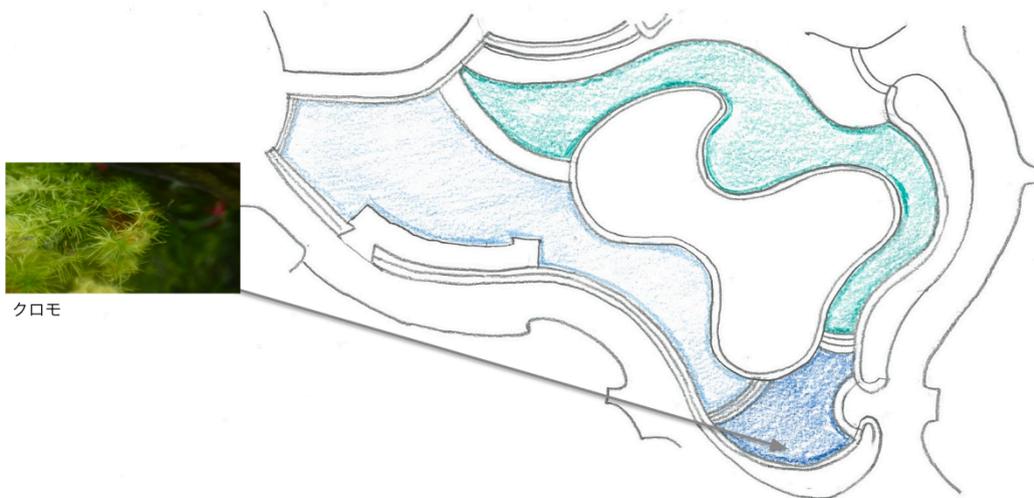


中池エリアからみた景色

下池／とっぷり（水深40～45cm）

ゆっくり散策、じっくり観察。ひょうたん島には何がいる？

比較的水深が深く、生き物が隠れやすい構造。落ち着いて観察したり、静かな時間を楽しみたい人向けのエリア。水深があっても光が少なくても育つ強い植物であるクロモを配置することで、生き物が隠れたり、産卵できる水中環境を作ることができる。深い水でも緑があることで、水辺の景観が豊かに。



クロモ



下池エリアの様子（左側は水が入る前）

5.2026年度年間計画案

今年度の構想や試行をもとに、来年度は、実際にみんなでビオトープづくりに取り組みます。植物の手入れ、観察会、作業会など、みんなが自由に関わりながら自然とつながる機会をつくれます。月ごとの活動を通して、さらにたくさんの地域みなさんに参加してもらえ、住む街に顔見知りが増えていくような、気軽な挨拶や声かけができる関係性が広がるような、そんな場でありたいと思います。活動は、play here公式SNSや小金井市のウェブサイトで告知をしていきます。

4月 ハス・セリの植え付け会

6月 クロモ・コウホネ・イグサ植え付け・ヌマエビ放流

7月 メダカ放流・イグサ刈り取り会

8月 夕涼み会

9月 自然観察会

10月 公園内で素材ハンティング

11月 鳥の巣箱づくり会

12月 どろんこ大掃除大作戦

1月 バグホテルづくり

2月 自然観察会・外来種駆除

3月 春にむけて何植える？会議

(活動内容は変更になる予定があります)